

高知県坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

「歩き龍馬」文化の創造を目指して ～龍馬の街道1,000キロ踏査～



ロンプ(NPO)代表
春野 公麻呂



私は現在、四国と山口県に残る、龍馬が辿った街道と関連史跡について、研究・踏査している。即ち、四国と山口県の脱藩道、龍馬が各藩の情勢を探るために脱藩直前に歩いた各街道、嘉永三年に四万十川の土木工事の現場監督として出向いた時に歩いた土佐西街道、茶店立ち寄りの伝承がある松山街道である。その内、四国内の脱藩道と脱藩直前に歩いた街道の踏査は終え、その成果をコースガイド書「龍馬が辿った道」(ロンプ刊)シリーズとして刊行している。これまで、その踏査で歩いた距離は往復1,000キロを超える。

[皆の知る「龍馬」は皆の知らぬ「龍馬」]

私が龍馬の街道の研究を始めたきっかけは、四国の脱藩道沿線自治体が発行しているコースガイド冊子を見てからである。私は10年以上前から、四国の無名峰や戦跡、鉄道廃線等のガイド書を地域活性の観点から発行しているのだが、数年前まで、敢えて龍馬は題材として取上げなかった。それは龍馬があまりにも「知られ過ぎている」存在だからである。誰もが知るものと本にする必然性はない、と考えていたのである。

しかしある時、ふと前述の脱藩道の冊子を見た際、愛媛県と高知県梼原町以外の地域の脱藩コースを、国道や県道に記していることに違和感を覚えたのである。例えば、いの町や日高村の国道沿いの何割かは藩政期、湿地帯であったため、そこに道は存在しなかった。

脱藩道と言えば、「龍馬遺跡」の中でも重要なものであるにも拘わらず、未だにその道跡が解明されていないことに愕然とした反面、これを解明すれば低迷している脱藩道人気に再び火がつき、沿線市町村の観光振興に繋がるのではないかと思い、踏査に取り掛かったのである。

そして高知市の龍馬生家跡から愛媛県の長浜港まで往復約300キロを踏査した結果、高知市以外の全ての市町村に古道が残存していることが判明したのである。

[驚くべき発見]

その「真の」脱藩道を踏査する過程で、新たな龍馬遺跡も発掘できた。龍馬が風呂を借りた志士邸や食事をした旅籠(現在も民宿として営業)、梼原松ヶ峠(まつがとう)番所まで龍馬一行を道案内した人物の子孫宅等である。

四国の「真の」脱藩道のガイド書を刊行後、これが高知県知事に認められたことにより、更なる龍馬への探究心が芽生えることになったのだが、そんな中、隣県のある驚くべき新聞記事を偶然発見したのである。

その'02年の記事には、龍馬が脱藩直前、讃岐琴平から阿波美馬の奉行邸に行き、そこで多額の活動資金を貰い、土佐に帰った旨の伝

承が記されており、更にその奉行屋敷は現存し、そこに龍馬が使用した布団や番傘、木製便器まで残っているというのである。それにも増して驚くことは、その奉行が船中八策の原案である国是七条を、最初に龍馬に説いた人物とされていることである。

早速調査したところ、龍馬と関わった多くの人物も浮かび上がってきたのだが、この伝承内容に矛盾する点はなく、「口伝史実」である確信が得られたので、その文久元年10月14日から翌年2月29日にかけて龍馬が歩いた四国四県の街道踏査に入ったのである。この旅路に於いて龍馬は長州萩で久坂玄瑞に会い、そこで脱藩を決意し、阿波の奉行邸では「維新への開眼」を行うことになるのであるから、この街道は脱藩道以上に重要な「みち」と言えるだろう。

[「歩き遍路」よりも「歩き龍馬」]

ところで、四国四県の龍馬街道の総距離は500キロを超え、沿線市町村は32自治体に及ぶ。更に脱藩直前に龍馬が歩いた四県の街道は回遊コースとなっている。それを元に去年4月、私が地元新聞に打ち出したのが「歩き龍馬」構想である。これは「歩き遍路」になぞらえたものだが、龍馬街道を徒步旅行で辿り、龍馬の追体験をしようというものである。道々の風景を愛でながら、寺社境内や峠で休憩し、微笑む地蔵に手を合わせ、大きな集落の旅館等に泊まりながら続ける徒步旅行はまさに、藩政期の旅の体験に他ならない。車の旅では見えない龍馬の「残影」も、徒步の旅ならくっきりと瞼に焼き付けられることだろう。

この龍馬街道をより身近に感じて貰うため、去年春から高知と徳島県の各自治体施設で無料写真展も開催している。写真はコースに沿って市町村別に掲示しているので、街道歩きを擬似体験できることだろう。写真以外にも実物の幕末大砲の砲弾や幕末期製造の大砲の模型、藩札、各藩の地域貨幣、龍馬の拳銃と同型銃等も展示してある。

[第一回「龍馬の研究大賞」は誰の手に?]

私のように、一般の龍馬研究家や公的機関が行わないような研究を地道に行っている「草莽の龍馬研究家」は少なくない。が、残念なことにこれらの研究が全国的に周知される機会は少ない。これは龍馬研究界にとって大きな損失と言わざるを得ない。対策としては、現代龍馬学会や龍馬記念館が幅広く全国から情報を吸い上げ、それを整理してカテゴリー別に分け、再び全国へ発信すること等が考えられる。「龍馬の研究大賞」というような賞を設け、毎年研究レポートを全国から募集するのも一つの手段であろう。その時「古記録がないものは信用できない」というような愚鈍なことを言っているようでは、龍馬界の進歩はない。受賞者には高知までの往復の旅費と宿泊費、寸志が与えられ、龍馬記念館での講演が約束される。そして入選者たちの研究を一冊の冊子として刊行する。

あらゆるジャンルの龍馬の研究が集積・周知され、成熟していく初めて「真の龍馬維新」の幕が開くのである。その幕を開けるのは、あなたかも知れない。

二三話

—犬歩棒当記（一）—

矛盾する史料のはざま

宮川 穎一

龍馬の婚約者だったとされる千葉佐那について筆者はこの一年間くわしく調べてきました。とても他人とは思えないほどにあります。

千葉佐那の基本史料は明治二十六年八月二十一日に甲府の小田切家に滞在中の佐那にインタビューした山本節の「坂本龍馬の未亡人を訪ぶ」という記事である。それは『山梨日日新聞』『読売新聞』『女子学雑誌』にほぼ同じ内容で続けて掲載された。この記事の中で佐那は「龍馬と結納を交わした」と述べているのだ。

二人の婚約の真相については更なる検証が必要だが、筆者の最大の疑問点はこの山本の記事にみえる佐那の人柄である。記事全体からはこの五十六歳の千葉佐那是快活でよくしゃべり、よく笑う明るいおばちゃんといった印象を受ける。ひとり寂しく晩年を送っていたようには決して受け取れないのだ。

筆者の違和感は佐那が「明るく、よくしゃべる」点である。確かに坂本龍馬はこの佐那を姉乙女に紹介する手紙（推定文久三年・十四日付。北海道坂本龍馬記念館蔵品）で佐那のことを「至りて静かなる人なり。ものかずいわす」と書いていたではないか。

このふたつの史料が示す矛盾した千葉佐那像をどうみるべきか。龍馬の記述を重視して、山本節の観察と記述の不正確さを指摘する人もいるのだが、それはどうだろうか。



佐那の兄千葉重太郎が陽気でおしゃべり好きな江戸っ子だったことは丹波山国隊の記録『征東日誌』に明らかだ。その妹が無口とは考えにくい。桶町千葉道場には多くの侍が剣術の稽古に通つていて、佐那は若い男性としゃべることには慣れていたはずである。では龍馬が受けた佐那の物静かで無口な印象はどうしてなのだろうか。

筆者の結論はこうである。千葉佐那是龍馬が本当に好きだったので「彼の前でだけ無口だった」のではなくだろうか。猫を被っていたとは思わない。好きな男性の前でうまくしゃべれない女性。スポーツが得意でサバサバした男勝りな女性が本当に恋をしたときに取る態度のように感じられるのだ。美人だった佐那が龍馬の死後も生涯を独身でとおしたことがその愛の深さを物語る。

これは実は「歴史の史料論」ではない。時空を超えた「男女の問題」なのである。

コラム・龍馬のこと 人間・坂本龍馬の魅力

高知桂浜郵便局長
大崎 隆徳

会員便り

中岡慎太郎の魅力!

長州 マツノ書店
松村 久

私は山口県の片隅で古本屋のかたわら維新史料の稀覯本を復刻しており、八年前からは県外の本も手がけている。

幕末に活躍した地域は限られる。先ずは贖罪の念もこめ会津と取り組む。紹介の新聞記事を見ると、「何と宿敵長州が、また会津へ??」小社は直販専門なので、直接電話注文が入る。お互いに方言丸出しで困ったがトラブルもなく、これまで『会津戊辰戦史』など七点を復刻してきた。薩摩ではマスコミにこそ歓迎されたが、西郷、大久保とも地元ではほとんど売れず。仙台、水戸に至っては、全国的に高く評価されている本なのに、なぜか新聞は無視。この地で「明治維新」は禁句なのか。

さて、土佐は長州以上に幕末への関心の高い地域である。超零細の小社はいつも「限定三百部」の上、根がへそ曲がりのため龍馬ブームにも乗れず……。そばにいるいぶし銀、中間に目をつけた。本書の復刻を強く推して下さるお客様も多く、この二月に史上初の中岡伝、昭和三年刊『中岡慎太郎先生』（尾崎卓爾著）を復刻した。

今は固定客だけで大半を売り、マスコミへは宣伝しないが、いつぞや『維新土佐勤王史』を復刻したときお世話をなった「高知新聞」へ謹呈したところ、今回も好意的な記事になった。そして一万円もする本が三日間で五十冊近くも売れ、その後はやむなくお断わり！

たった一紙でこんなに売ることは十年に一度もない。この盛り上がりは会津以上。ちなみに購入者の多くは慎太郎生誕地に近く、彼の話になると止まらない。といえば、もとを正せば本書の著者も地元の熱狂的ファンだ。すべては、中岡慎太郎の人間的魅力によるものであった。このことをあの世で一番よろこんでいるのは、きっと盟友・龍馬に違いない。

高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015
<http://ryoma-kinenkan.jp>